

モーツァルト (J.トレグ編) : ヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲 K.423 より 第2楽章、第3楽章

K.423 (と、K.424) は、1783 年、ザルツブルク大司教から作品を依頼されたミハエル・ハイドン (ヨーゼフ・ハイドンの弟) が病床に伏していたため、モーツァルトがゴーストライターとして作曲したとされる。ヴィオラを愛奏したモーツァルトは、当該パートを単なる伴奏に留めず、楽器の特性を存分に活かした内容に仕上げ、本曲に不朽の価値をもたらした。

「第2楽章 Adagio」は、美しく叙情的な緩徐楽章。歌うようなヴァイオリンをヴィオラが豊かに支え、時には複雑な装飾音を伴って交錯する。軽快なロンド形式の「第3楽章 Rondeau. Allegro」では、舞曲風の躍動感あふれる旋律が繰り返される。卓越した技巧を要する、華やかで快活なフィナーレとなっている。

ハイドンの作品

ピアノ三重奏曲 第12番 ホ短調 Hob.XV:12

ハイドンの短調の曲は「疾風怒濤 (シュトゥルム・ウント・ドランク)」の余韻を感じさせるものが多く、1788/89 年作曲の本作もその系譜に入る。第1楽章冒頭から美しくも、どこか翳りのある旋律がピアノによって提示され、ハイドンらしい均整の取れた形式の中にもロマン派を予感させる深い情感が漂う。緩徐楽章 (第2楽章) 以降はホ長調に転じ、フィナーレのロンド (第3楽章) も明るく軽快に進み、ヴァイオリンがピアノと対等に渡り合う場面も見られる。

カプリッチョ ト長調 Hob.XVII:1 《豚の去勢にや8人がかり》

オーストリア民謡「豚の去勢には8人必要だ」にもとづいた、1765 年という比較的初期 (30 代前半) のピアノ曲。いかにも民謡らしい (泥臭い) 主題を使いながらも、ハイドンは驚くほど技巧的で精妙な対位法を駆使して変奏を重ねていく。

ピアノ三重奏曲 第25番 ト長調 Hob.XV:25 《ジプシー・ロンド》

2 回目のロンドン訪問時 (1795 年頃) に書かれた、ハイドンのピアノ三重奏曲の中でも最も有名な作品。第1楽章は変奏曲形式で、穏やかさと劇的な展開が交互に現れる。第2楽章のポコ・アダージョは、甘美で瞑想的な美しさを誇る。第3楽章は表題の由来となった楽章で、「ハンガリー風 (ジプシー風)」のスタイルを取り入れた、熱狂的で野性味あふれるフィナーレ。足を踏み鳴らすようなリズムと哀愁漂う旋律の対比が聴衆を熱狂へ引き込む。

ピアノ三重奏曲 第27番 ハ長調 Hob.XV:27

ロンドン時代の傑作の一つで、優れたピアニストであったテレゼ・ヤンセン (バルトロツィ) 夫人に捧げられた。ハ長調という基本的な調性を用いながらも、音楽は壮大に広がる。第1楽章の冒頭から、まるでシンフォニーのような輝かしさと風格が漂う。ピアノ・パートには当時、最先端だった技巧が盛り込まれており、フィナーレのプレストでは、息つく暇もないほどの疾走感と、知的でウィットに富んだ転調の妙が楽しめる。

幻想曲 (カプリッチョ) ハ長調 Hob.XVII:4

1789 年に出版されたこのピアノ曲もオーストリア民謡 (「お百姓の奥さんが猫を逃がした」) にもとづいている。ハイドン自身が出版社への手紙で「演奏は少し難しいけど、愉快的な曲」と述べている通り、両手が激しく交差する奏法や、鍵盤の広い音域を駆け巡るパッセージ、さらには途中でホルンの和音を模したような響きが現れるなど、ピアノという楽器のポテンシャルを押し広げるような試みがなされている。

ピアノ三重奏曲 第29番 変ホ長調 Hob.XV:29

ロンドン時代 (1797 年頃出版) の完熟したハイドンを示す作品。第27番と同じくテレゼ・ヤンセンに捧げられた。第1楽章では、力強い和音の導入に続き、優雅な行進曲風の主題が奏でられる。予期せぬ転調や装飾的なピアノのパッセージが印象的。第2楽章には「無垢に (innocente)」という珍しい指示があり、シンプルで美しい旋律が歌われる。第3楽章は、ドイツの舞曲「アルマンド」にもとづいた、活気ある、エレガントな終曲となっている。